回転寿司の証明

針とら

「もし、あなたが殺人を犯したと仮定しましょうか」
「……」
「しましょうか」
「……は？」
「あなたが、殺人を、犯したと、仮定するの」
「あのさ」
「なに？」
「オレ、なんかした？」
「別になにもしてないわよ。あ、それとって」
「えっと……シメサバ？」
「違う違う、隣の。うに」
「うに」
「うにぃ」
「うぬぃ」
「ううぅぬぃぃぃぃ。……ありがと」

「で――オレは別に、何も危険なことはしてないわけだよな？」
「まあ」
「殺人を連想されるようなことは、断じてしてない。寿司を食っている、一小市民にすぎない」
「うん」
「んじゃどうして急に、そんな危険な仮定がでてくるワケ？」
「危険なことを連想させるものが、必ずしも端から見てすぐに危険とわかるとは限らないわ」
「はあ……なんか深い意味があるようで、実はまったくない発言だな」
「ともかく、あなたが殺人を犯したとするのね」
「……まあいいけど」
「で、あなたは逮捕されちゃって、警察にしょっぴかれて、裁判にかけられるのよね」
「かけられるのよね言われてもな」
「で、あなたは裁判で過失を主張するの。でも検察は故意だと主張するわけよ」
「まあ話の流れが掴めないというか」
「そのとき、もし検察がこの事実を握ったら、あなたが実に周到で計算高い性格をしているかが立証されて、裁判官にとても悪印象を与えてしまうと思うの。それできっと有罪にされてしまうのよ」
「おーい……。あのさー、話が吹っ飛んでてついていけないんだけどさあ……。いったいなんのことだよ、おいてかないでくれよ」

「私はそんな、あなたに不利な証拠を残したくないの」
「証拠って」
「だからそれ、やめた方がいいんじゃないかしら」
「なんのことだよ……」
「私の青皿を、自分の赤皿の山の上に重ねるの」
「……」
「気持ちはわかるわ。確かに赤皿ばかり積み重なってるのは、会計するときに恥ずかしいわよね。ああ、あいつ一番安いのしか食ってねえぞって、貧乏人めって、みんなに後ろ指さされるかもしれない」
「そこまで」
「でもだからって、青皿を一枚だけ一番上に載せて隠すなんて、それってなにか卑怯じゃない？」
「いや、これはさ……」
「それに会計するときは皿の色だってチェックするんだから、それじゃ隠したことにならないでしょ？」
「いやもちろん席を立つ前に、赤と青と黄と緑全部混ぜて、偏りがなく相互に、縞模様として現れるように並べ替えるつもりだったよ」
「……」

「そうすれば赤皿ばっかりとってたって印象も薄まるし。完璧な縞模様じゃ逆に不自然だってんなら、ところどころ偏りをつけてもいいけど」
「……」
「その哀れむような瞳は何？」
「あのね」
「うん」
「あなた、いっつも回転寿司に来ると、赤皿しかとれないわけ？」
「うん、親の躾でさ」
「躾……」
「子供の頃から回転寿司来ると、親が赤皿ばかりとるの見てたからさ。なんかこう子供心に、他の皿はとっちゃいけないんだな、って思ってたの」
「……幼少期のトラウマというやつね」
「んでそのまま成長して、他の色の皿に、ある種の禍々しさみたいなものを感じるようになっちゃったワケ」
「哀しい話だわ」
「こう、青皿をとると、心が罪悪感に耐え切れないというか……」
「それで私が他の色の皿をとると、ちらちら盗み見てたわけね」
「……見てた？」

「見てた。捨て犬が、人間が部屋の中でおいしそうにご飯食べてるのを、窓の向こうから見つめるような……そんな目つきで、見てた」
「くうん」
「がらがらがら」
「くんくん」
「しっしっ、てめぇに食わせる飯はねえんだよ」
「きゃんきゃんっ」
「……」
「……きゃうん……」
「ごめんお願い、そんな目で見ないで」
「……おう」
「ともかく、そんな数十円程度の違い気にしないで、なんでも食べればいいでしょ」
「だってさ……」
「別に無理して奢らなくたっていいわよ。割り勘。割り勘なんだから食べないと損よ」
「そういう問題じゃないんだよなあ。信念の問題というか」
「回転寿司なのよ回転寿司。カウンターと違うのよ。安いのよ」
「うーん……」
「まったく……回転寿司でこれじゃ、一生カウンターなんて行けないわね。この貧乏性」

「カウンター行きたいの？」
「行きたーい。寿司屋のカウンターでうにを注文しまくるのが私の夢」
「ほう」
「いっつもいっつも回転寿司じゃなあ……。夢がない」
「でもさ」
「ん？」
「君はそうやって回転寿司を嫌うけども」
「別に嫌ってはないわよ」
「カウンターっていったって、結局は回転寿司だろ？」
「……はい？　……カウンターはカウンターで、回転寿司じゃないでしょうが」
「いや、まあ聞けよ」
「はあ」
「つまりさ」
「はあ」
「地球が回り続ける限り、すべての寿司屋は回転寿司なんじゃないのか？」
「……」
「……」
「……は？」

☆★☆★☆

「はいお茶」
「ありがと」
「大丈夫？」
「大丈夫。……なんだか久々に頭痛がしただけ」
「バファリンいる？」
「食べ終わってからにしとく」
「で、まあさ。話の続きいくぞ？」
「こうなったら覚悟を決めるわ。……どうぞ」
「まず、地球は自転しているわけだよな？」
「はあ」
「で、地球の上には寿司が乗っているわけだ」
「なんというか……地球の上には人間が、とか海が、とかいう前に、まず寿司なのね」
「寿司はたとえベルトコンベアの上に乗っていなくても、地球の自転にあわせてくるくる回る」
「……」
「これを回転寿司と言わずしてなんと言うワケ？」

「いや、あのね……」
「さらに、地球は太陽のまわりを公転しているらしい」
「……らしいわね」
「とすると、地球の上の寿司皿が太陽のまわりをくるくる回っているのと同じことだ。そう考えるのが自然だ」
「凄く不自然な気がしてしまうの」
「気のせい」
「……」
「ともかく宇宙から見ればさ、すべての寿司は地球の自転と公転の影響を受けて複雑な軌道を描いて回転している回転寿司なんだよ。それはカウンター席だろうと変わりゃしないんだ、寿司が地球にある限りな。お、なんかこれって名言じゃない？　『寿司が地球にある限り』」
「どうして寿司の話から宇宙の話になるのかしら……」
「要はさ、回転の定義の問題なんだよ」
「はあ」
「んと、ちょいマテ」
「……」
「……っと、ここに一冊の国語辞典がある」
「やたら重そうだと思ったら……」

「暇つぶしに使えるから、持ち歩いてるんだよ」
「暇つぶしに……？」
「うん」
「どうやって」
「たとえば……そうだな……。『茶碗蒸し』。鳥肉・野菜・ぎんなん・しいたけなどに、鶏卵をだしでうすめてかけ、茶わんに入れて蒸した料理」
「……」
「おもしろいだろ？」
「なにが」
「……『へんてこ』。変なようす。妙なようす。みょうちきりん。へんてこりん」
「……」
「……おもしろいじゃないか」
「だからなにが」
「中学のときの塾の先生が、とても楽しそうに国語辞典のシュークリームの説明を朗読してた」
「それを見ているのは、確かにある意味面白いかもしれないけど」
「で、まあ……『回転』。くるくるまわること。転回」
「……」
「回転の説明で、転回って……」

「深く考えないことが肝心よ」
「まあ、くるくるまわること、ってあるよな」
「はあ」
「地球は自転しているわけだから、地球上のすべてのものは、くるくるまわっているよな？」
「うーん……」
「くるくる回っている……つまり回転している。当然、寿司もだ」
「それでも……普通そういう見方しないでしょ？」
「普通って」
「だから、地球上の人間から見て、回って見えるかどうかが問題なの。宇宙から見なくていいの」
「その場合、地球上で、自分でくるくる回っている人間がカウンターの寿司を見た場合、それはやはり回転寿司になるんだろうな」
「待って。お願い待って。どうしてそんなおかしな人間を持ち出すの？」
「差別は良くないな。彼はただ回っているだけだ。法は犯していない」
「そういう問題じゃないわ。もっと普通の人間を例にしてよ」
「何事も例外を考慮しようぜ」
「ともかく……地球上にいる、しかも動いていない人間の目から見て」
「動いてる人間の目から見たら、君が言うところの動いてない人間も動いてることにならない

か？」
「ならないの」
「それに地球上から見て動いていなくても、宇宙から見れば動いているわけだし」
「ねえお願いだから簡単に宇宙に飛ばないで。あなたにはどうか地球にいてほしいの」
「なるべくいるつもりだけど」
「ともかく……地球上にいる、しかも地球上の観測者から……もちろんその観測者は動いていない、地球に対して……でそんな観測者から見て動いていない人間の目から見れば……ああもうわけわかんなくなってきたじゃないっ」
「それが狙い」
「ともかくそうすれば、カウンターの寿司は回転してないの」
「だったら辞書には、『回転』。地球に対して静止している地球上の観測者から見てくるくるまわること、と書いてなきゃおかしいじゃないか」
「書いてある方がおかしいわ」
「国語辞典がそんな不正確なことでいいのか」
「あなたの正確さに合わせてたら世界は滅亡するわ」
「ともかくこんな曖昧な書き方である以上、宇宙から見た回転だけが無視されるいわれはないといえる」
「いえるのか」

「で、そうすると、すべての寿司は回転寿司ということになる」
「なるのか」
「まあつまり、君が夢見ている回転じゃない寿司なんて、幻想にすぎないのさ。現実には、そんなものは存在しないんだ」
「……」
「だからカウンターへの夢なんか捨てちまえよ。そうすれば楽になれる。な？」
「なんか物凄く自己を欺いているような気がするけど」
「気のせい。まあ、以上、すべての寿司屋は回転寿司であることが示された。Quod Erad Demonstrandum」
「くぉど……？」
「Q.E.D. ……証明終了ってコト」

☆★☆★☆

「さて、次は何とろうかな」
「……」
「がんがん食おうぜ。豪勢にさ」
「豪勢にね」

「たまご、カッパ巻き、納豆巻き、シメサバ……」
「うに、いくら、ボタン海老、大トロ……」
「……」
「なに？」
「いやなんでも」
「なにか言いたそうじゃない」
「いえなんにも」
「ちょっと考えたんだけどね」
「ん？」
「あなた、ちょっと誤魔化してない？」
「なにを？」
「証明を」
「……なんで？」
「あなたさっき、国語辞典で定義を調べたわよね」
「そうだよ。とっても正確だろ？　裁判の法律解釈で六法全書を根拠にするようなもんさ」
「なんで『回転寿司』の定義を調べないで、『回転』の定義を調べたわけ？」
「……載ってなかったもん、『回転寿司』の定義なんて」
「だからあなたは『回転』の定義を『回転寿司』の定義として代用して、論を進めたわけね」

「まあ」
「そこが誤魔化しだわ。あなたは罠を張ったのよ。……とても狡猾な罠を」
「ほほう……ならば教えてもらおうか。その罠というやつを、ね……」
「……」
「……」
「今ちょっと悪役の演技に陶酔してたでしょ」
「君も探偵の演技に没入してたな」
「ともかく、罠だったの」
「大袈裟な。たいした問題じゃないじゃん？」
「いいえ、とても重要なところよ。いい？　そもそも、『回転寿司』とはなんなのか？　『殺人現場』は『殺人の現場』。『猟奇殺人』は『猟奇的な殺人』。『回転寿司』は『回転する寿司』。確かに、それらしい感じがするわ」
「言葉の選定にとっても偏りが」
「でも、『殺人現場』『猟奇殺人』の二つと、『回転寿司』、これは決定的に違うのよ」
「明らかに違うよな」
「同じように思えるのは、錯覚なの。いい？　逆に考えてみるの。『殺人の現場』は確かに『殺人現場』だわ。『猟奇的な殺人』も『猟奇殺人』でしょう。でも、『回転する寿司』が『回転寿司』とは限らない。反例があるの。たとえば！」

「……」
「……」
「……なにしてるの？」
「見りゃわかるでしょ」
「オレ、手元で寿司皿をくるくるする女の子見るの、初めてだよ」
「貴重な体験ね」
「手元で寿司皿をくるくるする女の子が彼女で、オレって幸せ者だなあ」
「でしょー」
「これから好みの女性のタイプを言うときは、手元で寿司皿をくるくるするような子がいいなって、そう言うことにする」
「それは素晴らしいわ」
「あははは」
「あはははは」
「……」
「……疲れてるとこ悪いけど、話進めるわよ」
「うん……。でも、わかったから、もう止めてほしいな」
「はい」
「アメリカの自由の女神像に対抗できるのは、寿司皿を回す女神像しかないと思った」

「……で」
「うん」
「これって回転寿司とは言わないわよね？」
「んー」
「その場でくるくる回っている寿司……つまり、その場で回転する寿司。でもこれ、回転寿司って言わないわね？」
「んー……」
「言わないわね？」
「……うん」
「『回転する寿司』なのに、『回転寿司』ではない。これが、決定的なポイントよ。つまり、『回転寿司』は『回転する寿司』だけど、『回転する寿司』が『回転寿司』とは限らない」
「……反例を一つあげれば、『A ならば B』命題は崩れるというワケ、ね」
「えっと、なんていったらいいのかしら。よくあなたが使ってる……ヒツヨウジュウブンなんたら」
「……つまり、『回転する寿司』は『回転寿司』の充分条件ではあるが必要条件ではない、と？」
「そうそれそれ。だから『回転する寿司』は『回転寿司』の必要充分条件でない」
「つまり『回転する寿司』と『回転寿司』は同値でない」

「よって二つを同じように扱って議論を進めることが、そもそも間違いである。よってカウンター寿司は幻想などではない。Q.E.D. 証明終わ――ありがと」
「上出来」
「そう言ってもらえると満足だわ」
「どういたしまして」
「なんだか今の時間がまるで有意義なものだったみたいに思えてくるもの」
「それは幻想」
「やはり」
「君の言う通り、『回転する寿司』は『回転寿司』の充分条件にすぎない。集合論から言えば、『回転する寿司』は『回転寿司』の真部分集合である。つまり『回転寿司』という集合の中に含まれているにすぎない」
「回転寿司から集合論に話を飛ばせる人間なんて、そうそういないわね」
「式に示すと、『回転する寿司⊂回転寿司』となるワケだ」
「悪夢のような式ね」
「まあ細かく言えばラストは、『カウンター寿司は幻想などではない』ではなく、『カウンター寿司が幻想ということが証明されたわけではない』だけどな」
「そんな細かいことはどうでもいいの」
「でも、カウンター寿司が幻想でないと証明されたわけではないんだぜ？」

「両方証明されていないなら、今証明なしで通用している事柄を仮の法則として使い続けたって、問題はないと思うわ」
「……まあな」
「ふふ、勝った」
「でも仮だ。覆される可能性も、０じゃない」
「限りなく０に近いけどね」
「そのうち第二第三の反カウンター寿司派が現れるさ……その日までせいぜい、その安息を貪っておくがいい……」
「……ぐらり」
「ひゅるるるる」
「ばしゃーん」
「崖淵に駆け寄り、海面を見下ろす主人公」
「しかし既に彼の姿はなく、波が大きく打ちしぶくだけであった」
「完」
「……」
「……」
「……」
「……」

「……あ、……えっと、お茶はー……ああはい、そうそうここですね、はい。あはは」
「……」
「……」
「……恥ずかしい奴」
「……あなたもね」
「ノリすぎたな……」
「他人の存在を完璧に忘れてたわ」
「こうやって若者は嫌われていくんだろうな」
「若者の評判にまた泥を塗ってしまったわけね」
「真実の探求の前には些細な問題さ」
「そういうことにしておきますか」
「うむ」
「……ところで」
「ん？」
「『回転寿司』の定義が載ってなかったっていうのは本当？」
「ああ、それは本当。もっとも……」
「……うわ」
「……こっちなら載ってるかもな」

「新語辞典まで持ってたのね……」
「敵の属性を考慮して持ち替えるワケな」
「ワケか」
「えっと……あった。『回転寿司』。……寿司屋の業態の一。客は巡回する専用のコンベアーで寿司などの載った皿が通過していく間に、自分の食べたいものを選ぶ。精算は客の手元に残った皿の枚数・種類を基に行う。通常の寿司屋に比べ安価であることが多い。商標」
「……」
「こんなことじゃないかと思った」
「予想してたのね……」
「なんか……はいオシマイ、って感じだろ？　付け入る隙がないというか」
「感じね」
「だから排除した」
「卑怯な」
「裁判だって不利な証拠は提出しないもんさ。歴史の整合性を狂わすオーパーツも、ないものとして扱われる。つまりは人間、見たいもの以外は見えないフリをするってことさ」
「回転寿司の話題から出てきた結論とは思えないわね」
「にしても」
「ん？」

「しばらく会わないうちに成長したな」
「むしろ人間社会から遠ざかっている気がしてしまうの」
「気のせい」
「えー」
「ま、んじゃ、ご褒美やろうかな」
「おお、なになに？」
「カウンター寿司。奢ってやるよ」
「おおおお。ほんと？」
「ほんと」
「マジ？」
「マジ」
「食べ終わった後、自殺しない？」
「保証はできない」
「……」
「うにばかり頼むと自殺確率は高まっていきます」
「まあ、それほど高いの頼まないから」
「信じてる」
「雰囲気を楽しむヨシ」

「ヨシ」
「えっと……いつにする？　今から？」
「今からにするか。まだおなか空いてるだろ？」
「うん。あんまり食べてないもの」
「じゃ、ラスト一皿食って出ようぜ」
「了解」
「何にする？」
「うーんと……」
「……」
「じゃあまた、うに。あなたは？」
「シメサバ」